

奥入瀬「野外博物館構想」において ネイチャーガイディングが担う役割

NPO 法人奥入瀬自然観光資源研究会 河井 大輔

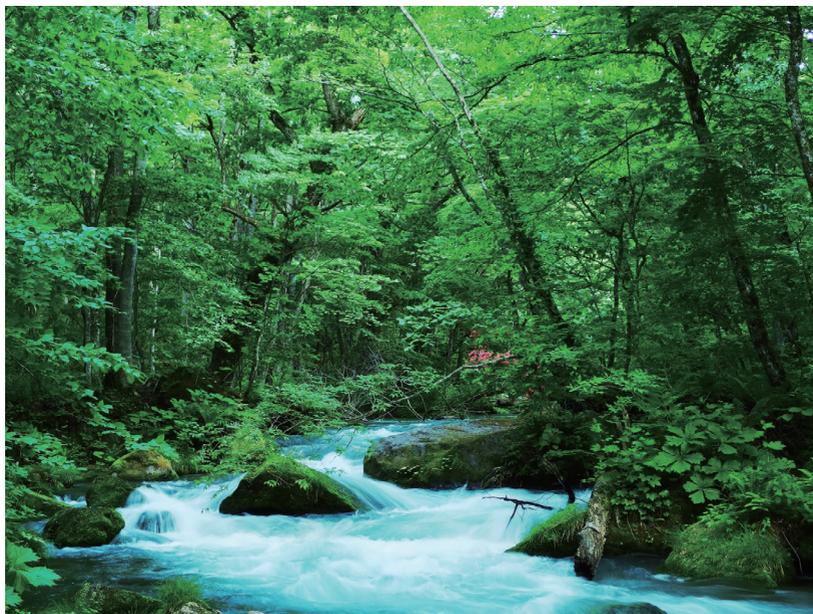
ネイチャーガイド（もしくはインタープリター）と呼ばれる、自然の見方や楽しみ方を伝える存在が、現代社会において担うべき役割に関するレポートについてはこれまでに数多く報告されており、また関連書籍も刊行されている（例えばサム・H・ハム『インタープリテーション』（2023）、津村・増田・古瀬・小林『インタープリター・トレーニング』（2014）など）。

本稿では、ネイチャーガイディング（インタープリテーション）に関する具体例の報告として、筆者が実際に関与している青森県・奥入瀬溪流おいらせにおける自然解説活動について述べてみたい。

立ちどまるから見えてくる

奥入瀬溪流（写真1）とは、青森と秋田の県境に位置する十和田湖とわだを源とする奥入瀬川の、その上流約14km区間に与えられた名称である。国指定特別名勝および天然記念物、十和田八幡平国立公園はちまんたいの特別保護地区に指定されている一方、明治時代から観光地として知られてきた地域でもある。溪流に沿って国道と歩道が併走し、毎年多くの観光客が訪れる。歩道の勾配差はキロ当たり約14mで、ほとんど傾斜を感じることがない。環境保全、渋滞緩和、落石等の災害回避の視点から、現在、溪流を迂回するバイパスが建設中であり、開通後には国道の車両規制が予定されている。また規制後の低公害型交通手段の導入も検討されている。

過去に伐採や植林の影響をそれほど受けていない原生的な溪谷林は、主に



(写真1) 奥入瀬溪流

カツラ、トチノキ、サワグルミの巨木群で構成され、それらの樹上には着生型の植物や蘚苔類、地衣類が豊富である。ほとんど改修を施されていない天然のままの溪流では、本来の河川のあるべき姿と、そこで産卵行動を行うサケ科魚類や希少な動植物を観察することができる。人為的な環境である国道の擁壁（石垣）^{ようへき}においても各種樹木の稚樹や草本類が生育し、さらに蘚苔類、地衣類、変形菌などが居並んでいる。その様子は、あたかも当地を代表する植物の見本市のようである。国道・歩道のいずれもが溪流と同じ高さに位置している箇所が少ないこと、道と溪流との距離がきわめて近いことも特筆すべき点である。この親水性の高さは、水源が十和田湖という巨大な水瓶であるため、流量が安定しているがゆえのことである。昭和3年の天然記念物指定以降、約100年近くの間、原生性の高い天然河川と渓谷林が保全されている。

このように自然観察には最適なフィールドである奥入瀬であるが、これまではその景観美のみしか喧伝されてこなかったため、物見遊山的な散策のほか、ウォーキング、サイクリングなどの楽しみ方が主となってきた。いずれ

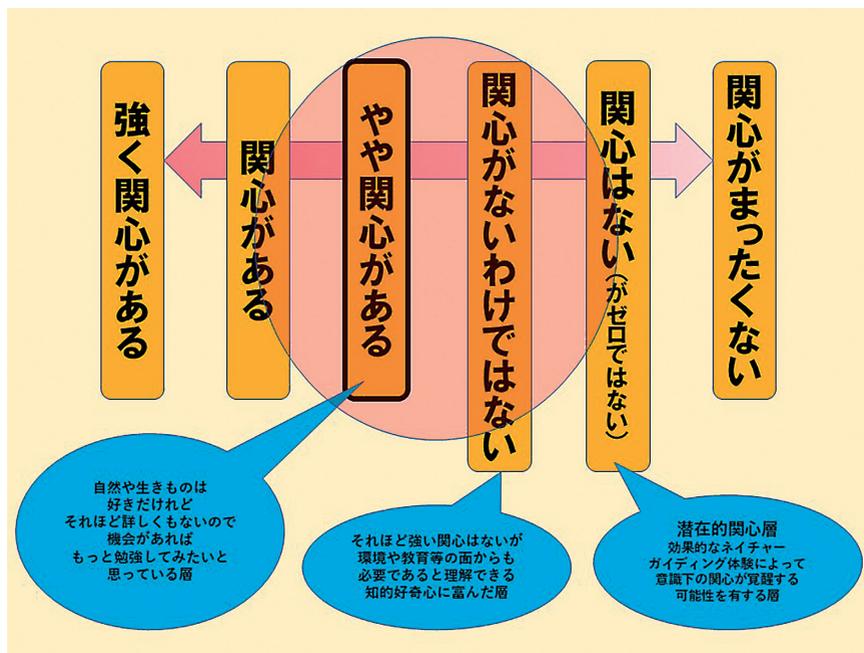
にせよほとんどのビジターが滝や流れの写真を撮るだけで、足早に景色を見流していく。こうなると、どんな樹が立ち並び、どんな花が咲き、どんな鳥が鳴いていたかなどの記憶は残りにくい。知的な気付きや理解につながらなくては観察に没頭する機会も得られないし、ましてや愛着など生まれえない。当然、保全への関心も期待できないということになる。

筆者の所属する NPO では、車両規制後の旧国道を「奥入瀬野外博物館構想」として利活用することを提案している。バイパス開通後に出現する大きな歩行空間を、野外博物館の回廊に見立てることで保護区と観光地を両立させ、従来の「歩く」だけの観光地から、自然を学ぶ・体感することに主眼を置いた「観る」を味わう天然の野外博物館への転換を図ろうというものである。博物館や美術館を駆け足で見てもわる人はいない。大きな自然は、小さな自然が集まってできている。それはまさに、立ちどまるからこそ見えてくる・聴こえてくる世界である。

ネイチャーガイドの存在意義

野外博物館としての奥入瀬で、自然観察に夢中になってくれるゲストを増やすにはどうしたらよいだろうか。昔日より知られた観光地であるだけに知名度は低くない。しかし観光地としてのイメージは固定化している。博物館や美術館で作品を鑑賞するように路傍の自然を觀賞することが楽しめる奥入瀬は、野外博物館にふさわしいエリアであるということ、新たにプロモーションしていく必要がある。

もちろん、誰もが自然観察に夢中になる（なれる）わけではない。野外博物館の想定顧客層（誘致するターゲット層）となりうるのは、どのような人たちだろう。自然界や野生の動植物などに対する強い関心を持っている（あるいは仕事や趣味で自然と深くつきあっている）層は、専門的な知見や技量を有しているがゆえに、観光地兼保護区（採集禁止地域）へ足を向ける機会が少ない。誘致すべき対象層は「やや関心がある」層（＝自然や生きものは好きだがそれほど詳しくはないので機会があれば学んでみたいと考えている層）、また「関心がないわけではない」層（＝関心があるとまではいえないが環境問題や情操教育等の面からも自然を学ぶことは必要かつ重要であると



(図1)「奥入瀬野外博物館」が誘致すべき想定顧客層

理解している層)、そして「関心はないがゼロではない」(まったくないわけではない)層(=潜在的関心層)であろう。自身のそうした趣向への自覚がないものの、効果的なネイチャーガイディング体験や印象深い自然体験等によって、眠っていた意識下の関心が覚醒する(呼び起こされる)可能性を有している人たちである(図1)。

ネイチャーガイドもしくはインタープリター(以下、ガイド)と呼ばれる存在は、ここで重要な役割を果たす(写真2)。知的的好奇心に富んだ層には、どのようにしてより深く興味を持って



(写真2) ネイチャーガイドによる自然解説

らえるか。潜在的関心層に対しては、その意識をどうやって覚醒させるか。自然を学ぶことの楽しさを、さまざまなタイプのゲストへ効果的に伝えることのできる技能者としてのガイド活動なくして、関心層を増やしたり、潜在層を覚醒させたりすることは難しい。

奥入瀬の観光事業や政策に関わってこられたキーパーソンを案内する機会がいくどかあったが、彼ら・彼女らが現地で異口同音に語ったのは、これまでこのような「自然の見方」（楽しみ方）を知る機会がなかった、ということであった。ゲストに対し、自然観察の楽しみ方をいったいどのように「手ほどき」しうのか。自然景観と、それを構成するさまざまな要素は、こんなふうに「観て」みると面白いですよ、楽しいですよ、という案内（ネイチャーガイドング）である。それが相手の知的好奇心をくすぐるものであればあるほど、聴き手を自然観察という魅力の「沼」にいざなうことができる。野外博物館におけるガイドとは、ゲストに自然を読み解く楽しさを伝える学芸員的な存在でなければならない。

もちろん野外案内を行う以上、まずは安全管理（リスクマネジメント）・時間管理・適切なコミュニケーションという基本技能が求められることは述べるまでもない。しかしそれだけでは足りない。魅力的な自然解説こそが案内人の個性、存在感を最も際立たせるものとなる。ゲストが自然観察に夢中になれるか否かは、ガイドの解説技量にかかっているといったも過言ではないだろう。

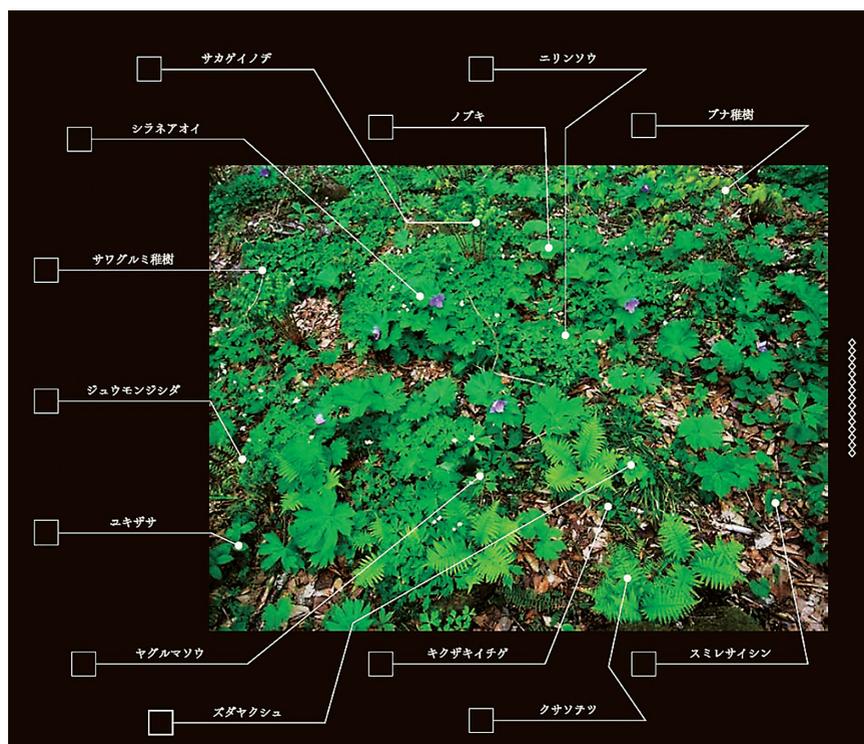
風景はものを語らない。眺めているだけでわかることもあるが、わからないことの方が多い。黙して語らぬ自然の言葉は、ふつうわからない。それを読み解いていく知見と技術があれば、自然観察は飛躍的に楽しくなるのだが、残念ながら環境教育のきわめて乏しい日本では、そうした知的な楽しみ方を体感しつつ学ぶ機会（意識的に求めない限り）得られない。景色をただ漫然と眺めるだけ、あるいは流し見するだけの観光スタイルから脱却できないのも無理はない。自然界の「しくみ」と「なりたち」を「やさしく・ふかく・おもしろく・まじめに・ゆかいに」（作家・井上ひさしの言葉である）紹介することこそガイドの存在意義がある。自然の案内人がインタープリター（インタープリテーションの担い手）と呼ばれるのは、自然界の言葉を人が理解できるよう、翻訳・通訳して聴き手に届けるがゆえのことである。

ネイチャーガイドが伝えるべきこと

自然界とゲストとをつなぐ役割を担うガイドは、具体的にどんな解説を行うべきなのか。弊会のガイディング活動では、特に以下の三つの視点から自然を語ることを重要視している。

- ◎デザイン（多様性＝色・形・手ざわり etc.）
- ◎ストーリー（生態系・自然史・歴史民俗 etc.）
- ◎スタイル（いろいろな自然の楽しみ方 etc.）

デザインとは、自然界はかくも多様性に満ちていること、実にいろいろな

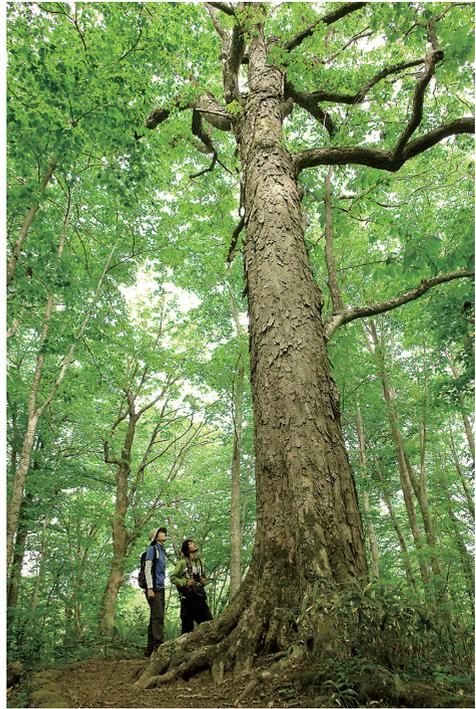


(写真3) 林床の植物の多様性 (『奥入瀬 diary』より)

形状のものが存在するということを伝える視点である。例えば森の林床を観察してみる時、そのわずかな視界の範囲にも、さまざまな植物が目映っているはずである（写真3）。この構成そのものが自然界のデザインなのである。ここには生物のみならず、鉱物や地形といったものも含まれる。そして、各構成物に施された多様な形状もまた個々のデザインである。そこに気づいてもらうことであり、似たもの同士の識別や分類といった観点からのアプローチでもある。

ストーリーとは、自然界は無数の物語に満ちていること、ど

んなものにも必ず「暮らし」と「歴史」があり、それらについて現地で実物を目の前に物語ることである。例えば、奥入瀬を代表する樹木のひとつであるトチノキ(写真4)。その巨木のもとに立ち、ガイドはゲストと対話をする。「この樹はどうしてここに立っているのだろうか?」「どのようにして生まれ、これまでどうやって暮らしてきたのだろうか?」「いま何歳なのだろうか? 生まれたのはどのような時代だったのだろうか?」「親はまだ生きているのだろうか? 子供はいるのだろうか?」「この樹あるいはそのまわりで暮らしている生きものにはどういうものがいるのだろうか? それらとこの樹はどのような関係にあるのだろうか?」「この地域の人たちは、この樹とどんなふうにつきあってきたのだろうか?」……そんな対話を続けるうち、感度の高いゲストのまなざしはどんどん光を帯びてくる。見上げたり、触れたり、樹下を探索したり、周囲を見渡したり、あるいは目を閉じて聴き耳を立てたり鼻を利かせたりしながら、樹と向きあう時間がいつのまにか過ぎていく。



(写真4) トチノキの巨木



(写真5) 倒木のある森の景観

例えば、路傍で観察できる森の中の大きな倒木(写真5-6)。

一本の大きな樹が倒れることで、そこにどんな影響が生じ、どのようなドラマ(関係性)が生まれるのか。苔が生え、それをベースに稚樹が育ち、微生物やバクテリアが活動して分解が進むことで土壌がより豊かになる。各種の小動物や昆虫の生息地となり、それをもともとめて鳥類や獣類がやってくる。小さな水源となる、といったことである。

例えば、倒木によって流れの変化した溪流(写真7-8)。奥入瀬は天然記念物指定地および特別保護地区の河川であるがゆえに、流路に倒れ込んだ樹は基本、そのままである。それが天然河川における瀬や淵、瀬頭(淵尻)、早瀬や平瀬といった構成にどのような変化を与えるのか。河床堆積物はどう変化し、照度や被度にどう影響が出るのか。それは、そこにすむ生きものたちにどういう影響を与えるのか。

例えば、激流中の流木から生えた一本のシダ(写真9-10)。



(写真7) 倒木のある溪流景観



(写真6) 倒木がもたらす影響を読み解く



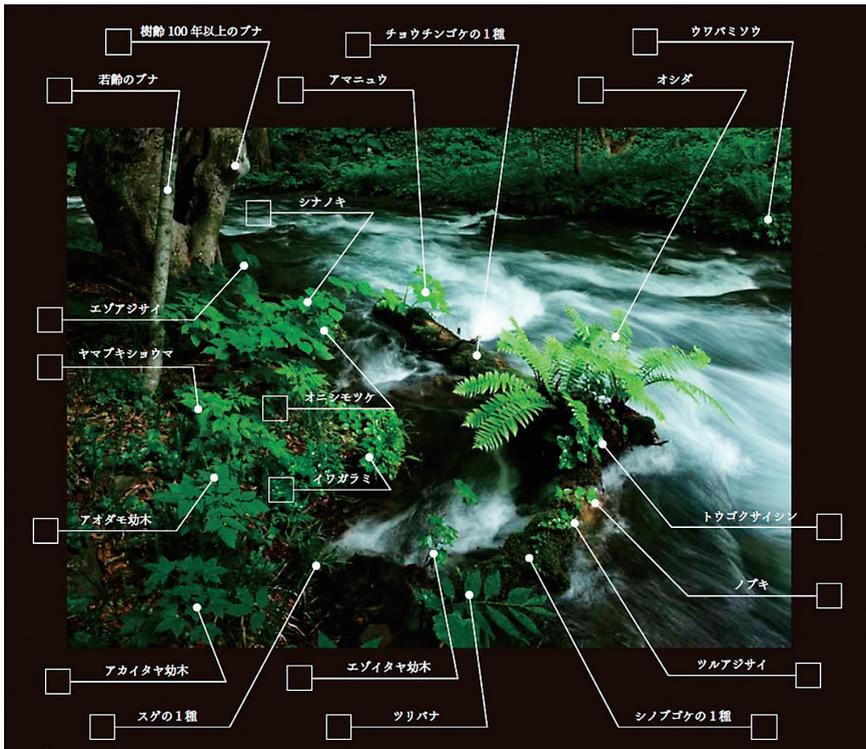
(写真8) 流れの多様性を読み解く

それが奥入瀬を代表する「オシダ」という名のシダであることから始まって、そこからガイドがゲストに伝えることのできる話題をテーマごとに列挙してみれば、それが実に多様であり、豊富であることがわかる（図2）。

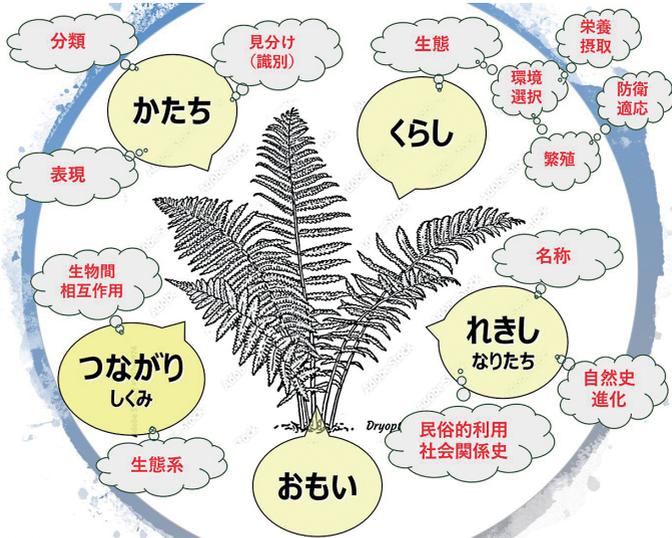
視点は面（景色＝全容）から点（個別の存在）へ、そして点から面へと移動していく。森と溪流においては、いろいろなものがいろいろなものに関わりあって暮らしている。そういう「しくみ」ができたのはいつからなのか。これからどうなっていくのか。大きな物語と、小さな物語。それらの融合。そして変遷と進化。ネイチャーガイディング・トークの面



（写真9）溪流の流木上に生育するオシダ



（写真10）溪流の流木上のオシダをめぐる多様性（『奥入瀬 diary』より）



(図2) ネイチャーガイドが1本のシダから語れること

白さは、こうした長短のストーリーの組み立てにある。

スタイルとは、ゲストに「あなたは今までどんなふうに自然と向かいあっているか」「こういう時間の使い方をしたことがあったか」という自覚や自問を促すことである。流れや倒木、巨木や大岩といったものと意識的に対峙するとき。植物やきのこの、匂いや手触りを比較しているとき。逆光で木の葉や水霧を透かし見るとき。蘚苔類やきのこといった小さな自然をルーペで観察するとき(写真11)。樹上着生の植物を小型望遠鏡で観察するとき(写真12)。双眼鏡で木の間越しに鳴き続けている鳥の姿を探するとき。手鏡を用い、



(写真11) ルーペできのこ観察



(写真12) 望遠鏡で樹上着生植物を観察

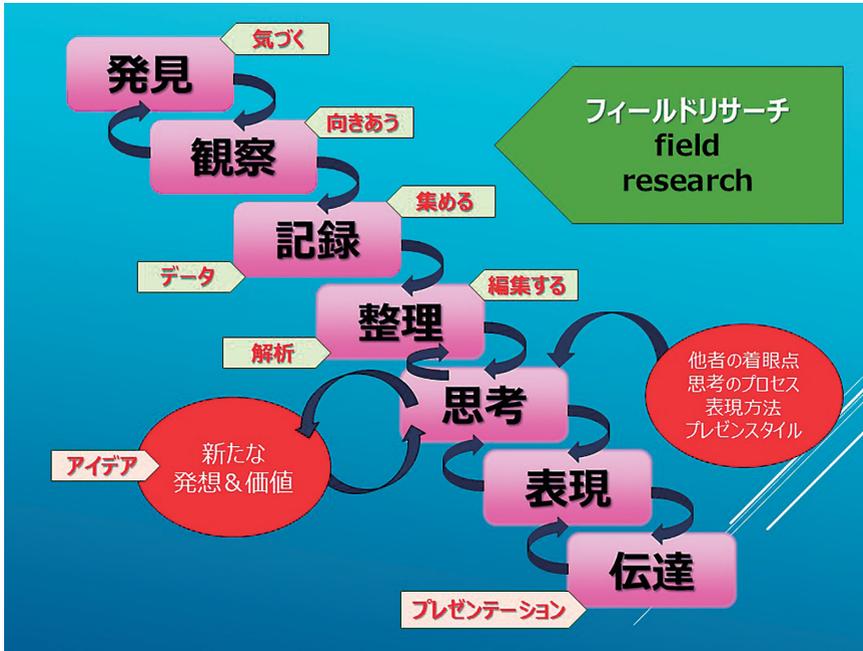
きのこの傘裏の裏を観るとき……ユニークな手法、ゆったりとした時間の使い方と、その味わい方。その認識は、ゲストにとって最高の土産となるだろう。それは普通の生活に戻ってもなお活用できる観察スタイルだからであり、それがゲストの日常（ライフ・スタイル）をも変えうる可能性を有しているからである。

「自然発見マップ」づくり

近年、弊会では新たなスタイルを模索している。一定の範囲内において、ゲスト自身がその興味関心のアンテナで見つけたものとその位置を、白地図上に図示してもらうオリジナルの「自然発見マップ」づくりという試みである（図3）。野外博物館のどこに、どんなものがあったか。それを第三者にもわかるよう、手描きの地図で自由に表現してみようというプログラムである。

これは従来の「伝えるガイド → 受け取るゲスト」というガイディングの流れを転換し、能動的な自然との関わりを体感してもらうのに効果的である。特に、発見対象を描写する時間において、ゲストは非常な集中力を見せる。フィールドリサーチの段階では、かなり注意散漫な印象を受けた参加者であっても、いざ「描く」段となると夢中になって手を動かす続ける。この時間、ゲストはまさに自然を観る・感じる・知る・考える・表現するということの楽しさを存分に味わっているように見受けられる。マップ完成後には、ガイドがそこへ知見や印象、アドバイスなどを加えながら意見交換していく。ガイドの側にも気付かされること、学ぶべきことはたくさんある。未だ実験的な段階ではあるが、発見→観察→記録→整理→思考→表現→伝達（プレゼンテーション）といった一連の流れは、年齢層を問わない環境教育の手法としても期待できる（図4）。

ネイチャーガイディングもサービス業の一環なのであるから、「何を伝えるか」というテーマ性よりも、「どう伝えるか」という手法に重きを置くべきだとの意見もある。聴き手を飽きさせない話術や工夫は確かに重要である。端正なプレゼンテーションふう、落語家ふう、茶飲み話ふうと、人により得意な〈語りのスタイル〉はさまざまだろう。



(図4)「自然発見マップ」づくりに期待される効果

しかし「人はなぜ自然観察に夢中になるのか」ということを考える時、やはりそれは人が自然の深淵しんえんを何かの拍子に覗いてしまったがゆえの昂揚感にあるのでは、と考える。とすれば、受け手に何を伝えられるのかという追究や掘り下げは、語り手にとっての最重要課題ではないかと思われる。

[参考文献]

サム・H・ハム, 山田菜緒子 (訳)『インタープリテーション』 山口書店 2023
 ロン・ジーマーマン, ジム・ブックホルツ, ブレング・ラッキー, マイケル・グロス 山本風音 (訳), 山本幹彦 (監訳)『インタープリターズ・ガイドブック 意味の探求を促すガイドの技術』 ラーニングアウトドア 2023
 津村俊充, 増田直広, 古瀬浩史, 小林毅『インタープリター・トレーニング 自然・文化・人をつなぐインタープリテーションへのアプローチ』 ナカニシヤ出版 2014
 国土交通省総合政策局『自然ガイドのためのおもしろヒントブック 興味をひきつける自然題材とそのメッセージ集』 東京官書普及 2002
 河井大輔『奥入瀬自然誌博物館 立ちどまるから、見えてくる』 奥入瀬自然観光資源研究会 2016
 河井大輔『奥入瀬 diary』 奥入瀬自然観光資源研究会 2020

河井大輔『奥入瀬が野外博物館を目指す理由 フィールドミュージアム新書Ⅰ』奥入瀬自然観光資源研究会 2024

河井大輔『エコツーリズムは奥入瀬観光を変えうるか フィールドミュージアム新書Ⅱ』奥入瀬自然観光資源研究会 2025

河井大輔『奥入瀬でネイチャーガイドが語ること（第一集）フィールドミュージアム新書Ⅲ』奥入瀬自然観光資源研究会 2025

河井大輔『奥入瀬でネイチャーガイドが語ること（第二集）フィールドミュージアム新書Ⅳ』奥入瀬自然観光資源研究会 2026